コタンとその立地

小　林　和　夫*

はじめに

知里氏[1] (1956) によると，アイヌの人たちは集落のすべてをコタンと呼んでいたというが，彼ら自身の集落は「家一軒しかなくても……一時的にせよ永住的であるにせよ家の在る所を kotan と云」っていたという。また，彼らは，「古く」は季節性の移動生活を営んでいて，季節性のコタンを持っていたが，それは「春から秋にかけては海辺に住んで……その際の住家を sak-chise（夏・家）と言い，夏家の在る所を sak-kotan（夏・部落）と言った。……秋の末には夏の家を引きあげて山の手の冬の家に移り，翌年の春まで穴居生活を営んだ。その家を toy-chise（土・家）と言い，それのある所を mata-kotan（冬・部落）と言った。或は riya-kotan（越年する・村）とも言った」ということである。

以下では，このような彼らの集落をコタンと記すが，本稿はこのコタン，そしてこのコタンの立地を考察することを目的としている。だが，これらについてはすでに先学諸氏の論考があり，しかもそれらは充実している。本稿では，諸氏の論考につけ加えるべきものはないが，少しばかり具体的にこれらを考察してみることとする。

(1)　コタン

19 世紀以前のアイヌの人たちの生活とコタンを文献によって見ると，「居所時節に替り有」(『津軽一統志』[2] 1731)，「魚鳥獣無之候得者，其村を捨て，又，魚鳥獣の有之所を見立て，其所に皆引越居住仕候故，所も不定よし」(『蝦夷島記』[3])，「家居はいづれへ移すとも心にまかせ」(『北海随筆』[4] 1739)，「年中同所には住居せず，獵産の多き方へ移りて所々に假住居し，年月をおくり，生涯住居を定ざるなり」(『蝦夷草紙』[5] 1790) などである。

これらによると，かつてのアイヌの人たちの生活は季節性の移動生活であり，コタンも季節性のものであったが，移動は「心にまかせ」てのもので，コタンも「假」のものでしかなかったかのようである。だが，それらの実際はそうではなかったらしい。『津軽一統志』によると，17 世紀半ばころ，日高地方の波恵川筋の集団と染退川（現静内川）筋の集団は長年にわたって戦いを繰り返していたが，原因は，すでに定まっていた漁猟範囲を両集団が力にまかせて侵犯し合っていたからだという。また，「狄あり　家十七軒」である「しやこたん」(積丹) という地名が記されているが，この「しやこたん」という地名は，彼らがそこで年々サッコタンを営んだことで生じたのである。このような，季節性のコタンが営まれたことで生じた地名は他の史料にも見ることができるが，それは，たとえば「マタコタン」(釧路川)，「リヤコタン」(富磯川) などである (表参照)。これらの境界紛争や地名によれば，彼らの季節性の移動範囲は一定していて，季節性のコタンも年毎に位置が変わるようなものではなかったのである。だが，18 世紀末ごろには，彼らの生活も，また，コタンもすっかり変化してしまっていた。

17 世紀半ばころ，岩内地方の首長の言[6]によると，和人は「拙者共取候川にて……鮭すきと御取……に付」，それに対して抗議すると，「松前の知行所にて候間，取申に我儘申とて御打たゝき」であったという。当時，和人は和人地に近い蝦夷地ではすでに自由に鮭漁し，彼らの生活を圧迫する振る舞いをしていたのである。だが，やがてそれに堪えきれなくなった彼らは，寛文九 (1669) 年，和人に戦いを挑み，敗北してしまった。和人はこの戦いの勝利に乗じて彼らを支配することに成功し，漁業やその他の労働に強制的に使役するようになった。『蝦夷地一件』[7] (1790) によると，18 世紀には，「場末」の霧多布，国後島などでも「近

* 釧路公立大学

表季節性のコタン

サクコタン	マタコタン	市町村・川筋	参考図
	リマウシナイ	東利尻町	『取調図』・『道庁図』
	モリヤウシナイ	東利尻町	『取調図』・『道庁図』
	リヤコタン	利尻町	『取調図』・『道庁図』
ソウヤ	リヤコタン	稚内市・富磯川	『取調図』・『道庁図』
クシヤブ	リヤウシナイ	稚内市・大沼	『取調図』
サクコタンナイ	リヤウシュナイ	中川町・天塩川	『取調図』・『道庁図』
	リヤウシナイ	羽幌町・天売島	『今井図』
(ヲベラシベツ)	リヤウシ	小平町・小平蘂川	『取調図』
	パンケリヤウシ	芦別市・芦別川	『道庁図』
	ペンケリヤウシ	芦別市・芦別川	『道庁図』
シヤコタン		積丹町	『取調図』・『道庁図』
シヤコタン		長万部町	『皇国總海岸図』
アブタ	リヤコタン	伊達市・長流川	『取調図』
サツコタン		えりも町	『取調図』
(ウシシベツ)	オン子リヤコタン	豊頃町・牛首別川	『道庁図』
	ポンリヤコタン	豊頃町・牛首別川	『道庁図』
シヘツチヤ	マタコタン	標茶町・釧路川	『取調図』・『道庁図』
(フシココタン)	リヤウシ(コタン)	網走市・網走湖	『取調図』・『道庁図』
トウフチ	トイカウシ	常呂町・佐呂間湖	『取調図』
(ヲトイ子ツブ)	リヤコタンナイ	雄武町・音稲府川	『取調図』
(ヲチシベ)	リヤコタンナイ	枝幸町・音標川	『道庁図』

註 ・「市町村・川筋」はマタコタンについてのものである。
・(　) 内のサクコタンは推定のものである。
・たとえばソウヤなど、———の付いたコタンは19世紀に現役であったことのあるコタンである。
・参考図の主なものについて記すと
・『取調図』；松浦武四郎『東西蝦夷山川地理取調図』(1859)
・『道庁図』；北海道庁測量作成(明治20年代)の5万の1地形図(小林和夫蔵)
である。

来は年中商人共手先え被召仕，自分稼とては存分不相成」ということであり，その強制的な使役は全蝦夷地に拡大してしまっていたのである。

なお，『蝦夷地一件』によると，その強制的な使役は「年中」であるが，『渡島筆記』[8] (1808) によると，「春始て和船來り……一禮を述べ畢て，扨今年も漁獵の時至れり。務て懈る事なかれ」ということであり，「海河山澤の事畢，賈人辭しかへらむ」とするのは「秋季より初冬の間」であった。また，『大概書』[9] によると，たとえば浦河場所の者は「春は二，三月頃より妻子を連て浜辺へ出，小屋を建，住居致し」，「九月末より右（引用者註元浦川，幌別川などの川筋）の家々え登候鮭を取り，干揚，飯料を貯置，……山に越年致」すのであった。この両書によって，彼らが和人の使役に従事するのは，一般的には春から秋にかけてのことであり，秋の末から翌春にかけては，かつてとほとんど同様の「自分稼」ができる期間であったと考えてよいのである。

18世紀末ころ，アイヌの人たちの大部分は，いわゆる夏季には和人に強制的に使役されて「自分稼」の生活を失い，かつてのようにコタンを営むことができなくなってしまっていたが，たとえば労働に不適な老幼，病弱の者は山に残り[10]，かつてと変わりない夏季の生活を営む者もいた[11]。また，使役される者の中にも，それから解放された秋の末，たとえば様似や幌泉の者たちは浦河場所へ鮭漁に出かけた[12]し，虻田，有珠の者たちは尻別川上流へ鮭漁に出かけ，越冬していた[13]。これらの移動はかつての季節性の移動とまったく同じなのであり，かつての彼らなら，その移動した所のすべてをコタンと呼んでいたはずなのである。

しかし，たとえば幌泉の者の「夏冬とも……本小屋と致」す所，つまりコタンとする所はただ一ヶ所となっていた[14]。当時の彼らの認識では，また，和人の認識でも季節性の複数のコタンは消失し，コタンは，いわゆる「永住的」なものただ一つになってしまっていて，たとえ「自分稼」でも，そこからの移動はすべてが出稼ぎであり，移動先は出稼地になってしまっていたのである。我々が観察の対象としている19世紀のコタンは，我々の村や部落とほとんど違わないものになってしまっていたわけである。

(2) コタンの立地

（イ） 18世紀末ころまでの幾つかの文献が記すコタンの立地，あるいは分布する所を見ると，「山の近くに住み，且つ海に於て漁獵する」（『蝦夷報告書』[15] 1622），「人家皆海邊に有て，漁撈を生業と仕り」（『蝦夷談筆記』[16] 1710），「総テ海濱ヨリ内地に多ク居住ス」（野作雑記譯説』[17]），「居所は海のはた川筋に村を建一むれづつ罷在候」（『蝦夷島記』），「海邊に住て山に住はすくなし」（『北海随筆』），「海辺，或いは川辺等にて，水に寄多分居住仕，山中の住居は稀に相見」（『蝦夷地一件』），「濱邊は蝦夷居住せり。地中に至りては蝦夷人住居せず」（『蝦夷草紙』）などであり，コタンの分布は内陸に少なく，主として海岸であったかのようである。

だが，19世紀になると，その初めころのコタンは太平洋側では海岸にも内陸にも分布し[18]，日本海側は石狩，天塩の両川筋を除くと海岸にのみ，また，オホーツク海側でも海岸にのみ分布している[19]。20年代になると，コタンはオホーツク海側でも，湧別，常呂，網走，斜里などの川筋にも，つまり内陸にも分布するようになり[20]，50年代には，その分布型は20年代と変わりはないが，内陸のコタン数が増してきている[21]（Ⅰ図参照）。

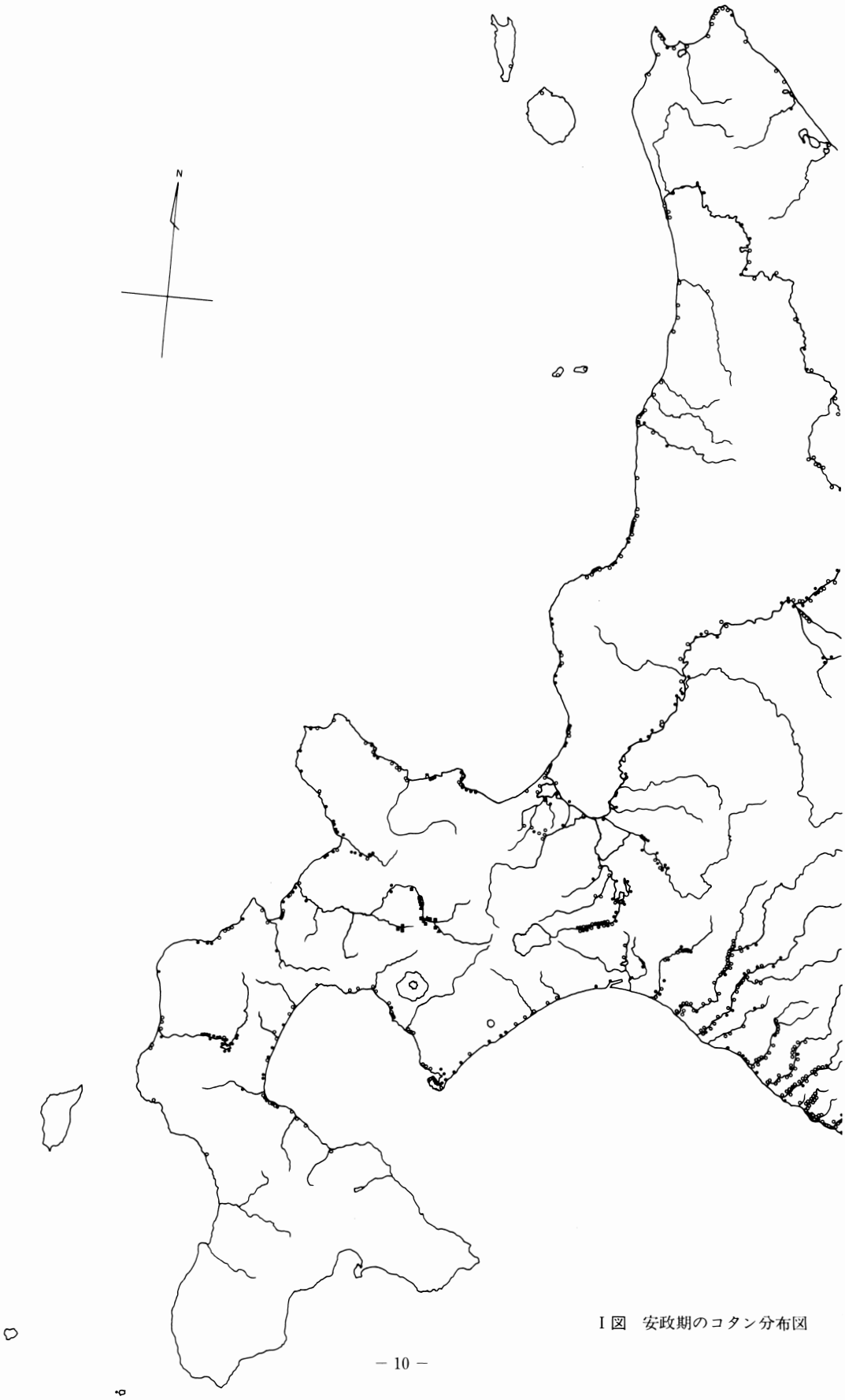
コタンの分布は19世紀の初めころから急速に海岸から内陸へと浸透しているが，それは，19世紀初めころから調査が次第に内陸にも及ぶようになったことと歩調を合わせている。たとえば早くから蝦夷地随一の大河として和人によく知られた石狩川では，17世紀半ばころに中流のコタンが記録されているし，また，その支流の千歳川中流でもコタンが記録されている[22]から，当時，アイヌの人たちが内陸に居住するのはこの石狩川の本支流に限らず，その他の長大な河川でも同様だったのではないだろうか。しかし18世紀半ばに近いころの和人でも「海を知りて山を知らざる者[23]」であったというから，山のコタンは記そうにも記すことができなかったのではないだろうか。確証はないが，かつてからコタンは内陸にも分布していたが，19世紀初めころから調査が次第に内陸にも及ぶようになり，したがってその内陸のコタンが記されるようになり，このことが，コタンの分布が海岸から内陸へと浸透していったかのような印象を与えているのではないだろうか。

（ロ） 推測は措くとして，コタンの立地，あるいは分布する所についての先学諸氏幾人かの論考要旨を紹介すると次のようである。

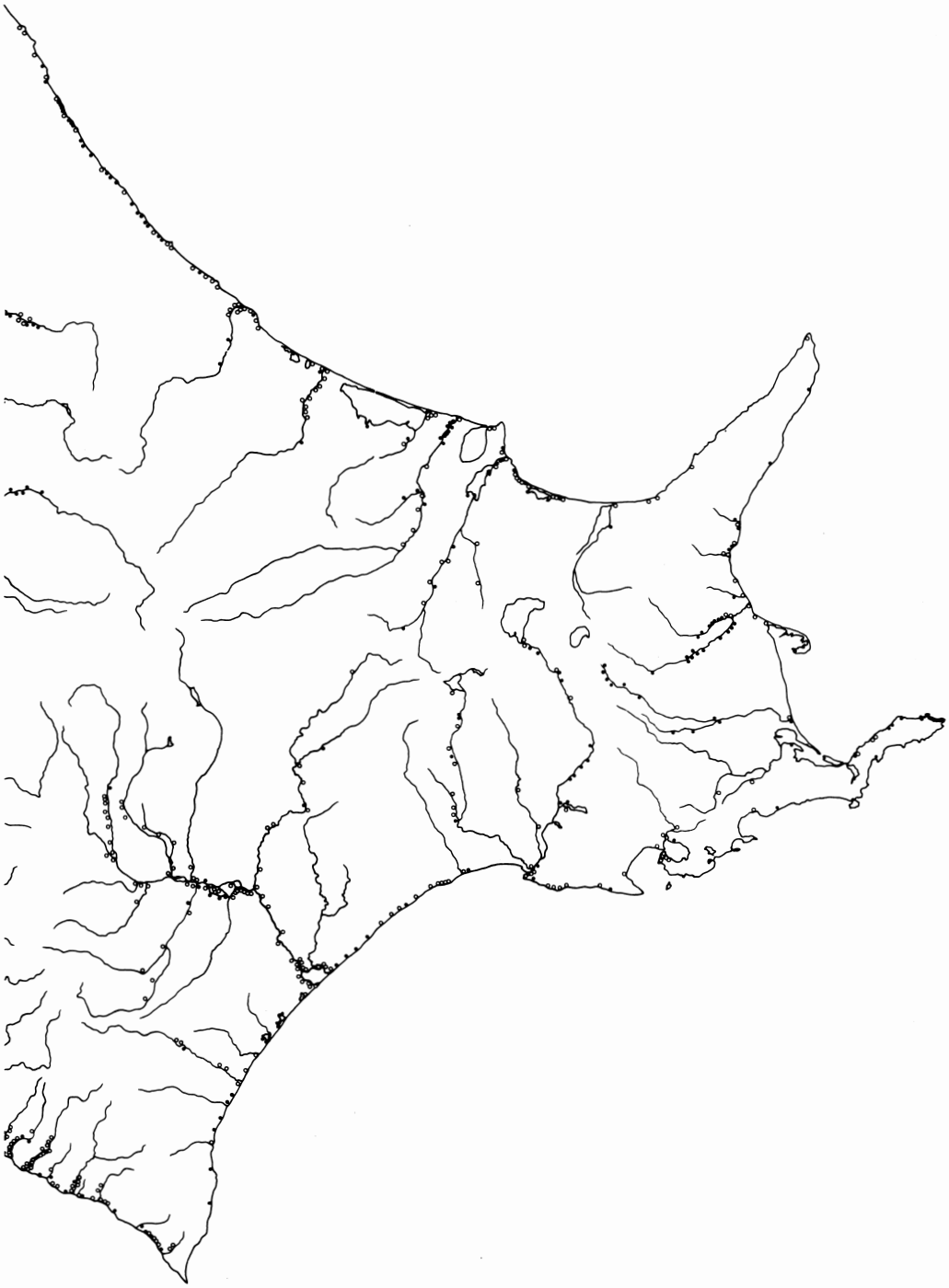
高倉氏[24]（1939）によると，「交通に便利な水辺，殊に川もしくは沼の岸の高所」にコタンは立地している。「ことに川辺」は「唯一の交通路」であり，「水産物，例えば鱒・鮭……など」，「例えばウバユリ……などの植物質」，「手数のかからぬ畑地」を提供してくれ，また，「飲料水」が得られ，「河岸の崖は……眺望のきく要害」を与えてくれたからだという。高倉氏はコタンの立地に必要と思われる条件をほぼ余すところなく記されているが，それらの重要性の順位については特に記すところがない。だが，高倉氏以降の諸氏はその中で重要と考える幾つかのもの，たとえば交通，鮭鱒漁，農耕などに焦点を絞って考察をすすめられている。

渡辺氏[25]（1964）によると，コタンの分布は「サケ産卵場の分布と相まって……川筋は限られている。一般に小河川系……ではその本流，大河川系……では本流の他に比較的大きい主要支流……に限られる。またどの川筋でも kotan の分布はサケの遡上限界より上流に及ばない」といい，「要するに kotan の分布は川筋を撰び，またその分布域はサケ遡上限界より下流で……通常はサケ・マス両者の遡上水域沿岸に当たる」という。コタンの分布は正にこの通りで，後述する筆者の見解も，この渡辺説の驥尾につくものなのである。

足利氏[26]（1968）によると，いわゆる山の者たちは「本来的」には「春夏は海浜で漁に従事し，



I 図　安政期のコタン分布図



0 10 30 60 km

II図　鮭鱒遡上図

凡　例
鮭鱒遡上河川
鱒遡上河川
鮭鱒遡上
鱒遡上
0
10
30
60 km

秋冬は山家に住して鮭漁・山猟に従事し」，このような「移動形態をとっている場合，大部分の地域に於ては，山家がやや永続的な生活の本拠と考えられていた」，つまりコタンと考えられていたとし，このように考えられたのは「越冬主食」の鮭の「漁獲期は主として秋であり」，「冬から初春にかけ……ある程度貯蔵される必要があ」り，しかも「鮭産の多い河川の上・中流は……山中の獲物に恵まれ……反面，冬期に海産のみられる地域は少なかった」からであるという。そして「鮭漁地点が同時に越冬地点」であったともいう。なお，この鮭漁以外に高倉氏が「列挙された河岸立地諸要因は，筆者には副次的なものとしか思われない」ということである。この見解中，「本来的」な「移動形態」が海辺と山であったということについては「補足」（イ）で，19世紀のコタンがかつての越冬地点（マタコタン）に由来するということ，また，その越冬地点（マタコタン）が鮭漁地点であったということは「補足」（ロ）で検討してみることとする。

羽田野氏[27]（1981）によると，コタンの立地する所は「中下流の河岸地形（自然堤防・河岸段丘斜面など）上」で，その「うちでも……河川の合流点で」，そこは「耕作にとってより適した土地」，「舟行にとってより恵まれた地点」，「とくに小河川との合流点はサケ類の捕獲にとってもすぐれた地点」であるからだというが，これら必要諸条件の「いずれが根本的でいずれが派生的」であるのかは，「サケ・マスの遡上限界をもってコタンの空白地帯を限ることの可否については，なお検討の余地がある」と渡辺説を批判，提出された空白地帯出現の理由に見ることができる。それによると，舟行が「根本的」で，鮭漁は「派生的」，「部分的」であるらしい。空白地帯が出現するのは，「丸木舟の遡行が居住域を大きく限っていた」からで，「この利便からはずれてコタンが立地する場合は，よほど強い理由があったに違いない」といい，また，「寒気をさけるためにも，有用な樹種の木材を得るためにも良い条件の土地ではな」く，「さらに部分的ではあるが……魚止めの滝がみられる場合には，それによってサケ類の遡上がさまたげられた」からだというからである。この重要性の順位は，検討過程が省略されているので，「補足」（ハ）で改めて検討してみることとする。

最後に筆者の見解を記すと，コタン立地にとって川漁，ことに鮭鱒漁が必須の，つまり最も重要な必要条件であるとすることで，渡辺，足利両氏の説を一歩も出ないものであるが，このような見解をとるに至った経過を簡単に述べることにしよう。

17世紀半ばころの石狩川筋の総首長ハフカセの言[28]によると，「惣て昔より，蝦夷は……魚鹿計被下，……たすかり申者に御座候」である。また，19世紀半ばころのある年の四月，屈斜路湖畔の者の言[29]によると，湖は「鮭至て多し」であるが，昨秋の鮭漁には恵まれず，「当年は此処に干鮭なし。此間までは饉飢なりしが，此頃漸々……ヲツトイ等取り……喰物に有つ」いたところであったという。和人がその彼らに食物を売ってほしいと頼んだところ，「鹿の干したると，ヲツトイの干たるを」売ってくれたという。

彼らによると，主食は常に「魚鹿」であるが，その「魚」は，たとえば芽室川（十勝川支流）は「鮭・チライ・鱒・鯇・桃花魚[30]」で，これらが一般的な河川の一般的な「魚」なのであった。芽室川は「喰料は十分に有る処[31]」であったから，彼らはこの「魚」で十分であったらしいが，この中でも大量に遡上する鱒と鮭は，食物の意味をこめてサキペ（Sak-ipe 夏の魚[32]），チュキペ（cuk-ipe 秋の魚[33]）と呼ばれていたことからも分かるように，夏から翌春にかけての彼らの主食なのであった。鱒と鮭のこうした重要性を見ると，自足自給的な生活を営む彼らのコタンは，鮭鱒漁の便のあった所に立地していたと考えてよいのであろう。鹿猟のために，コタンが川筋に立地する必要性はほとんどないからである。

(3) 補　足

（イ）　アイヌの人たちの季節性の移動は，これまでの論考（高倉，知里，足利の三氏）を一見したところによると，海辺と山（山の手）に限られていたかのようである。確かにサㇰコタンが海辺に，マタコタンが山（山の手）に立地している例，たとえば宗谷やクシヤブの者たちの季節性のコタンを見ることができる[34]が，しかしその移動が山中に限られていて，季節性の対のコタンのいずれ

もが山中にある例を見ることもできる（表参照）。

十勝川筋では河口から僅かに数粁上流のコタンの者も「川筋魚計食イタシ[35]」ていて海辺へは出ず，「偶々濱邊に出て潮水を嘗て鹹味を試るもあり[36]」というほどであり，その支流の牛首別川筋には「ウシシユベツ」と「オン子・ポンリヤコタン」という季節性の対のコタンを見ることができる。また，天塩川筋の者は「濱通り……漁事無之[37]」ということで海辺には住まず，「川筋上へ百里餘之間所々散在[38]」していたというが，その川筋には「サクコタンナイ」と「リヤウシユナイ」という季節性の対のコタンを見ることができる。海辺の生活を持たないのは彼らばかりでなく，石狩川筋の上対雁[39]や千歳[40]の者たちも山のみの生活であり，しかも彼らはそこに居住した当初から海辺の生活を持たなかったらしい。これらによれば，季節性の彼らの移動は海辺と山（山の手）とに限られていなかったことは明らかなのである。

（ロ）　採集した季節性のコタンを見ると，19世紀まで存続しているのはサㇰコタンが多く，マタコタンではただ一つ，和人の施設がある宗谷の者の「リヤコタン[41]」のみである（表参照）。採集した季節性のコタンは僅かであるが，その中で一つの明らかな傾向が認められるのである。19世紀のコタンのいずれに由来するのかは，この僅かな例で云々すべきではないのであろうが，しかしささやかなこの傾向を尊重し，19世紀のコタンの多くはサㇰコタンに由来するのであろうと考えたいのである。

次に，かつての越冬地点が鮭漁地点であったということについての推測には，少しの無理も感じられない。19世紀のコタンの大部分は越冬地点にして鮭漁地点であると考えられるからであり，また，尻別川上流の虻田や有珠の者たちの鮭漁地点も確かに越冬地点であったからである。だが，この推測に反する例も見られる。たとえば標茶の者の「マタコタン」（釧路川），フシココタンの者の「リヤウシ」（網走湖），クシヤブの者の「リヤウシナイ」（大沼）など，これらのマタコタン（かつての越冬地点）はいずれも鮭漁を目的とする所でなかったらしい[42]し，「パンケ・ペンケリヤウシ」を持つ芦別川筋も「鮭が無計，其外の者何にても有[43]」であった。しかも採集したその他のマタコタンについても，確かに鮭漁地点であったとの証明が得られない。マタコタンが鮭漁地点でなかった例は僅かであるが，しかし鮭鱒漁と19世紀のコタンとの関係，そしてサㇰコタンと19世紀のコタンとの関係をあわせて見ると，マタコタン（かつての越冬地点）が鮭漁地点であったとは必ずしもいいがたいところがあるように思われる。これも，いわゆる宿題とすべきものであるが，上記のことから，むしろ本来的にはサㇰコタンが鮭鱒漁地点であったろうと考えたいのである。

（ハ）　19世紀のコタン立地の必要条件として，舟行と鮭鱒漁のいずれが「根本的」であり，いずれが「派生的」，「部分的」であるのかを検討してみよう。

舟行の限界が居住域を大きく限っていた例として，尻別と西別の両川をあげることができる。尻別川は本来は磯谷場所の者の鮭鱒漁域で，上流まで鮭鱒が遡上したが，中流，上流に至るには難所があり，彼らは舟行可能な下流で生活していたという[44]。また，西別川も本来は根室場所の者の鮭鱒漁域であり，上流まで鮭が遡上したが，上流への舟行には難があり，彼らは舟行容易な下流で生活していたという[45]。この両川の下流では確かに舟行の限界が居住域を大きく限っている。だが，尻別川の中流は岩内の者が居住した所であり[46]，上流は虻田と有珠の者たちが越冬する所であった。西別川でも上流は釧路の者が居住する所であった[47]。この両川の中・上流では，鮭鱒漁に惹かれた者たちが舟行不可能であることを厭わずに移動し，居住していたのである。実は，アイヌの人たちが鮭鱒漁に惹かれて舟行不可能な，あるいは困難な所を居住域としていたのはこの両川だけではなかった。後志利別川中流に山越内場所の者が居住していた[48]し，朱太川上流でも虻田場所の者が越冬していた[49]。標津川上流では斜里場所の者が越冬していた[50]。十勝利別川（十勝川支流）や網走川上流のコタンも「白糠の枝郷[51]」であった。さらに石狩川本流のカムイコタン（神居古潭）は舟行の難所で，徒行するのが普通であったらしいが，その上流に多数の者が居住し[52]，下流の者とは勿論のこと，十勝川上流の者とも交流し，互いに移住する者もいたという[53]。

鮭鱒漁があるゆえに舟行不可能な所に居住して

いた例は意外に多いが，しかし鮭鱒漁がなくとも，舟行可能であるゆえに立地していたコタンを探しだすのはむずかしい。鮭鱒が遡上する河川，あるいはそれの遡上限界とコタン立地との密接な関係は渡辺氏がすでに胆振，日高，十勝地方の河川で示されている[54]が，安政期の文献[55]によって，もう少し広くその他の地方の河川を含めて見ても，コタンが立地するのは鮭鱒の遡上する河川であり，鮭鱒の遡上限界内であるといってよいからである（Ⅰ・Ⅱ図参照）。

彼らの生活は自給自足が原則であり，その彼らが，主食として重要な鮭鱒の得がたい所にコタンを営んでいたとは考えがたいが，しかし，もしそのような所にコタンを営んでいたとすれば，それは異常の状態と考えるべきで，むしろそのような状態に対してこそ「よほど強い理由があったに違いない」と考えるべきではないだろうか。重ねていうが，19世紀のコタンは舟行の便の有無にかかわりなく，鮭鱒の得られる所に，あるいは得られやすい所に立地していた。鮭鱒漁が容易であることこそが19世紀のコタンの立地にとって必須の，つまり「根本的」な条件であって，舟行の便の有無は「派生的」，あるいは「部分的」な条件であったと考えるべきではないのだろうか。

おわりに

アイヌの人たちの生活やコタンを詳細に観察できる具体的な記録は案外に少なく，「補足」で見たように，その少ない記録を検討すると新しい問題が提起され，理解がより困難になる場合もあるが，それは措き，改めて見解をまとめてみよう。

（イ）　かつてのアイヌの人たちは季節性の移動生活を営み，季節性のコタンを持っていたが，その移動範囲は一定していて，コタンも年毎に位置を変えるようなものではなかった。なお，彼らの季節性の移動は海辺と山（山の手）に限られていたわけではなく，山のみの場合もあり，したがって季節性のコタンを海辺と山とに持つ者も，山のみに持つ者もいた。

（ロ）　19世紀のコタンは我々の部落や村とさほどに違わないものになっていたが，それの大部分はサㇰコタンに由来するもので，鮭鱒漁はそのサㇰコタンでなされていたと考えたい。

（ハ）　19世紀のコタンの大部分は鮭鱒漁の便のある所に立地している。コタン立地の必要条件として最も重要なのは鮭鱒漁であったと考えたい。たとえば『蝦夷生計圖説[56]』（1823）によると，ある禁忌に触れないことが何よりも重要な必要条件であるという。だが，それでもコタンは鮭鱒漁のある所に立地している。鮭鱒漁は，その禁忌に触れぬことにも勝る，あるいは優先する重要な必要条件であったことは明らかなのである。

引用・参考文献

(1)，(32)，(33)知里真志保『地名アイヌ語小辞典』（1956）

(2)，(6)，(22)，(28)『津軽一統志』巻十（1731）；弘前市立図書館蔵，『新北海道史』第七巻史料一

(3)『蝦夷島記』（？）；『続々群書類従第8』

(4)，(23)坂倉源次郎『北海随筆』（1739）；『北門叢書』第2冊

(5)最上徳内「蝦夷草紙」（1790）；「北門叢書」第一冊

(7)『蝦夷地一件』；『新北海道史』第七巻史料一

(8)最上徳内『渡島筆記』（1808）；『日本庶民生活史料集成』第四巻

(9)『東蝦夷地各場所様子大概書』12『浦川場所大概書』；『新北海道史』第七巻史料一。以下では『東蝦夷地各場所様子大概書』を『大概書』と略記する。

(10)木村謙次『蝦夷日記』（1798）；『木村謙次集』上巻

(11)松浦武四郎『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』（1857）11巻『天之穂日誌』二（北海道出版企画センター刊）。以下では『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』を『丁巳日誌』と略記する。

(12)『大概書』13『シヤマニ場所大概書』，14『ホロイツミ場所大概書』

(13)『大概書』2『阿武多場所大概書』，3『宇壽場所大概書』

(14)『大概書』14『ホロイツミ場所大概書』

(15)児玉作左衛門『デ・アンジェリスの蝦夷国報告書に就いて』；『北方文化研究報告』第4輯（1941）

(16)松宮観山『蝦夷談筆記』（1710）；北海道大学図書館蔵

(17)N.ウイットセン著　馬場貞由訳『東北韃靼諸國圖誌野作雑記譯説』（1809）

(18)『大概書』

(19)，(37)，(38)田草川傅次郎『西蝦夷地日記』（1807）

(20)『蝦夷全図』；国立国会図書館蔵

(21)，(55)松浦武四郎『竹四郎廻浦日記』（1856）（北海道出版企画センター刊），『丁巳日誌』，松浦武四郎『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』（1858）（北海道出版企画センター刊）。以下では『竹四郎廻浦日記』を『廻浦日記』，『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』を『戊午日誌』と略記する。

(24)高倉新一郎『アイヌ部落の変遷』（1939）；『アイヌ研究』

(1966)
(25), (54)渡辺仁『アイヌの生態と本邦先史学の問題』；『人類学雑誌』第七十二巻第一号（1964）
(26)足利健亮『東蝦夷地における和人と蝦夷の居住地移動』；『人文地理』Vol. 20, No. 1（1968）
(27)羽田野正隆『十勝平野におけるアイヌ集落の立地と人口の変遷—江戸時代後期を中心に—』；『北方文化研究』第14号（1981）
(29)『戊午日誌』（1858）13巻『久須利誌』上
(30), (31)『戊午日誌』7巻『登加知留宇知之日誌』五
(34)東嶌元稹『東海参譚』（1805）；『日本庶民生活史料集成』第四巻，『戊午日誌』30巻『古似登以誌』
(35)皆川周太夫『十勝川之図』（1800）；函館市立図書館蔵
(36)『東蝦夷地道中記』（1791）；北海道立文書館蔵
(39)『旧事記』；北海道立文書館蔵
(40)『大概書』7『勇武津場所大概書』
(41)『廻浦日記』巻の12
(42)『戊午日誌』14巻『久須利誌』中，22巻『安婆志利誌』，30巻『古以登以誌』
(43)『丁巳日誌』9巻『再篙石狩日誌』七
(44)『丁巳日誌』1巻『志利辺津日誌』，2巻『曽宇津計日誌』，19・20巻『報志利辺津日誌』上・下
(45)『戊午日誌』12巻『奴宇之辺都誌』
(46)『丁巳日誌』2巻『曽宇都計日誌』
(47), (51)『大概書』16『久壽里場所大概書』
(48)『丁巳日誌』21・22巻『報登宇志辺津日誌』一・二
(49)『大概書』2『阿武多場所大概書』
(50)『戊午日誌』18巻『志辺都誌』
(52)『石狩川之図』（村山直之所持図）；札幌市藻岩北小学校蔵
(53)『丁巳日誌』6巻『再篙石狩日誌』四
(56)泰檍丸撰　村上貞助・間宮林蔵増補『蝦夷生計図説』（1823）；『日本庶民生活史料集成』第四巻